

北川隆吉先生のプロフィール

川 上 周 三

北川隆吉先生は、1949年に名古屋の第八高等学校（旧制）を卒業後、東京大学文学部社会学科に入られ、1952年に卒業、大学院に入学されました。1953年10月に東京大学文学部の助手に就任されることになり、文学部助手を4年半務めたあと、1958年4月に法政大学社会学部の専任講師に着任され、以後、同助教授、教授を経て、20年間法政大学社会学部の教授として勤務されておられましたが、請われて1978年10月に名古屋大学文学部哲学科社会学講座の主任教授に就任されました。そして1992年4月、本学大学院文学研究科に社会学専攻を設置するにあたり、その設立要員として本学文学部に教授としてお迎えしました。

北川先生は、東京大学卒業後、これまで60年近く社会学の研究と教育、研究者の育成に、そして日本社会学会の理事を歴任、また日本学術会議会員としてわが国の社会学のみならず、日本の学術・教育に多大な貢献をしてまいりました。

とくに、北川先生は、研究者育成と調査・研究の組織者として定評のある先生でした。その一端を紹介すると、大学院生、そして助手の時代には当時の東大の若き研究者の卵の兄貴分として弟弟子を育て、その多くは現在各所の大学で中心的な研究者、教育者として重きをなしています。法政大学では社会学専攻（大学院）の設置の中心となり、本学名誉教授の柴田弘捷先生を始め、多くの研究者を育ててこられました。名古屋大学でも同様に、大勢の研究者を育ててこられました。本学教員の私も、名古屋大学時代に、先生に御指導御鞭撻を賜りました。先生のお歴々の弟子の中で、末席の最も小さな弟子であります。本学でも、7年間という短い期間ではありましたが、多くの研究者を育ててこられました。

そして、これまでに、いくつかの大学の枠を超えた調査・研究グループを組織し、着実に成果を挙げてこられました。関東・東海の研究者、院生を組織して大々的な調査研究を行うとともに、いくつかの研究企画を進めてこられました。そしてその調査・研究グループでの活動が、まだ若い研究者を育てる役割も果たしてきました。その意味で研究・教育における名オルガナイザーでもあられました。

先生の本学での在職年数は7年でしたが、この間、大学院文学研究科長、専修大学21世紀構想会議委員として専修大学、大学院の改革に積極的な寄与をされ、また多くの学部生や院生を熱心に指導されてこられました。

先生は、本学定年後も、本学社会学専攻の大学院生のために、研究会を組織され、一月に一回、大学院生の指導を続けてこられました。

また、本学定年後も、専門の分野である労働社会学分野ばかりでなく、東京自治問題研究所を経て現代社会構想・分析研究所を母体にした研究活動や、グローバリゼーション関係の研究、地域社会学、理論社会学、社会学史、社会運動論、地方自治論、東アジア研究、看護の社会学の研究等、多面的な分野で、独創的な研究活動を展開してこられました。

先生は、2013年の夏頃には、御元気な御様子でしたのに、その終わり頃から、御体調を崩され、2014年4月7日に御逝去されてしまいました。

そのニュースに驚愕すると共に、大きな支えを失った悲しみで一杯であります。

晩年に至るまで、その倦むことがなかった先生の研究意欲と教育活動に対し、唯々平身低頭し、改めて畏敬の念を深くしているところです。

生前における先生の専修大学社会学への大きな寄与に対して、深い感謝の念の気持ちを捧げるとともに、先生の弟子の一人として、これまでの先生の学恩に改めて感謝の意を表明して、先生の生前における来歴紹介の言葉とさせていただきます。

〔付記〕

なお、先生の研究業績の一端につきましては、北川隆吉教授還暦記念社会学論集編集委員会編『社会変動と人間』（時潮社 1989年）の巻末の「業績一覧」を御参照下さい。